



高校生に伝えたい

特集

卒業生が語る 長崎大学での 学び

今回の特集には、

この春長崎大学を巣立った先輩や大学院に進学した先輩10人が登場。

期待と不安を胸に入学した頃の思い出話や、
大学生活を送る中でどのように目標を設定し、
どのような学びを得られたのか振り返るとともに、
いよいよ社会に羽ばたこうとする卒業直前の心境も
じっくり語っていただきました。

先輩たちのお話は、
これから大学生になる皆さんにとって
将来像を描く大きなヒントになるでしょう。

Graduates talk
about
Nagasaki University

留

学を高校時代に一年間経験し、大学入学前から英語や海外に強い関心を持つっていた原田怜奈さん。核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NGO)が主催する「ナガサキ・ユース代表团」の第六期生として、三年次には国際会議に参加しました。

「スイスのジュネーブで開催された核兵器不拡散条約(NPT)再検討会議の準備委員会での傍聴が大きな目的でしたが、期間中は他の国際会議への参加に加えて、各国政府やNGO関係者、現地の学生との意見交換などもあり、本当に忙しい毎日でした。勉強会も事前に繰り返し、現地でのスケジュール調整やアポ取りもすべて自分たちで担当。帰国後には県内外での発表会や講演などで、現地で学んだことを発信する機会にも恵まれました。そうした中で、核兵器の問題や平和活動への理解はより深まったと思います」。

翌年開催された会議にも参加されたそうですが、どのような理由があったのでしょうか。

「一度目も活動は充実していましたが、不完全燃焼という部分もありました。慣れない国際会議でのスケジュール調整に追われて傍聴に集中できず、専門用語もまだまだ勉強不足。もっと知りたいという気持ちがとても強くて、翌年ニューヨークで行われた会議に、長崎大学核兵器廃

入学時の私



グローバルな交流を通して
多角的な視野が身に付いた

多文化社会学部 グローバル社会コース 卒業
(現・国際公共政策コース)

原田怜奈さん

HARADA Rena

国際会議での会話はもちろん英語。事前に専門的な用語も勉強した上で、会議を傍聴しました。



とにかく時間に追われていたけれど、自分が選んだやりたいことから楽しめました。



英語力向上のほか、留学中はフランス語の修得にも挑戦。国際政治や国際関係の授業も積極的に履修したそうです。

先生からの
メッセージ

理論を踏まえた
自分なりの視点

さまざまな理論の考え方に接する中で、常識的なものの見方を疑える、自分だけの確かな視点を身に付ける。その大切さを研究室では伝えてきましたが、原田さんも大学院への進学を意識し始めた頃から、自分のテーマと視点が明瞭になってきたと思います。これからも大学での豊かな経験を大切につつ、自分で考えることを続けてほしいと思います。

多文化社会学部
森川裕二 教授



美

美術専攻として中学校教育コースの教員免許を取得した江藤萌果さん。明るくてハキハキとした受け答えが印象的です。

「実際は人見知りですし、高校時代まではどちらかというと内向的だったんです。でも教員の仕事を指す上で、もっと明るくて活発な人になりたいと思う、大学入学時から社会的になろうと自分なりに努力してきました。まず、大学生協の学生団体に所属してイベントやセミナーの企画・運営に携わり、学部や年次を越えた仲間とのコミュニケーションを深めました。三年次の夏には、美術科の友人と共同で、長崎県美術館のスペースを使った木製プロトタイプ制作のワークショップを開催しました。さらに美術館のエデュケーターの方が講義で来校された際には自らお話を伺いに行き、その縁から長崎県美術館でのアルバイトにつながりました。展示やイベントの裏側を間近で見ることができ、とても良い経験になりました。さまざまなグループに所属して人と接する中で、以前よりも視野が広がり、積極的な性格になったのかなと思います」。

そうした中で、ご自身の制作物にも何か変化はありましたか。

「私は高校でも美術科で油絵を専攻していたので、周りはいつも美術が

入学時の私



自分から外に一步踏み出すことで
世界が大きく広がった大学生活

教育学部 中学校教育コース美術専攻 卒業

江藤萌果さん

ETOU Moeka

大学で本格的に日本画に挑戦した江藤さん。油絵との違いに苦戦しながら、新しい表現を素直に楽しみました。



自分のやりたい気持ちがあれば、自由に学んで経験できるのは大学ならではの。



学生団体のセミナーでは大勢の前で発表することも。少しずつ経験を重ねて慣れていったそうです。

先生からの
メッセージ

自由な発想で
のびのびと制作

絵で表現したいものは一人一人違いますし、学生本人がやりたい方向に進めるよう、背中を押してあげることを大切にしています。江藤さんは最初から制作したい物がはっきりしていたので、特別なアドバイスをすることもありませんでした。卒業後は教える立場になりますが、授業や作品に取り組む真摯な姿勢は、きっと子どもたちにも響くと思います。

教育学部
牧野一穂 准教授



好きな人ばかり。でも大学でいろいろな人と話す中で、美術が苦手な人の存在を初めて身近に感じました。そんな経験から、卒業制作では、どのような人でも美術を好きになってもらえるきっかけにしたいと、香水をテーマにしました。三種類の香水のパッケージをデザインし、中身も自分で制作したんです。さらに、香りのイメージを日本画で描いて並べました。平面的な絵画の枠にとらわれない自由な制作ができたのは、視野の広がりが大きな要因だと感じています。卒業後は福岡の中学校で勤務されるそうですね。どのような教員になりたいですか。

「高校生の頃にお世話になった先生が、落ち込んだ時に優しく寄り添って励ましてくれたことが強く印象に残っています。生徒を力強く引っ張ることも大事かもしれませんが、そっと支えて、そばにいてあげられる先生になりたいです」。

医

学科六年の百岳駿平さんに取材したのは、医師免許の国家試験終了直後でした。試験はいかがでしたか？

「自己採点しましたが、おそらく大丈夫だと思います」。

それはよかったです！ この後のスケジュールは？

「合格が決まったら厚生労働省に医師として登録して、卒業式を迎え、四月一日からは研修医として諫早の中核病院に行くことになります。そこで一通りの診療科を経験して、自身の専門を決めていきます」。

どうして医師になろうと決断したのでしょうか？

「西海市大島に住んでいる祖母が心臓病を患っていて、島では治療ができずに佐世保まで通院していたのを見て、人の役に立ちたいと思ったのが医学部を目指した動機です」。

「コードブルー」などの医療系テレビドラマにも影響されました」。

入学してみても楽しかったか？

「忙しいけれどすごく楽しかったですね。もちろん勉強はハードで、覚えることが多いのですが、先生に聞きながら特に大事なポイントを押さえました。この血管は手術で重要になるから覚えよう、とか。それと、予習や復習より、毎時間の授業に集中していました。カリキュラムでは、一、二年次で体のつくりなど基礎を学び、三年次か

入学時の私



勉強と部活とバイトのバランスも成長につながった

医学部医学科 卒業

百岳駿平さん

HYAKUTAKE Shunpei

実は百岳さんは3年次に全日本医科学生体育大会の個人戦で全国優勝し、本学の学長賞も授与されました。



実習に入るまでに自分が興味を持てるジャンルを見つけておくと、より学びに積極的になれます。僕はがんの化学療法に興味を持ちました。



先生からのメッセージ

医学部で部活をする意味とは

私は長崎大学医学部OBで、ソフトテニス部の先輩として百岳さんを見てきました。長大医学部は体育系の部活が盛んですが、これは組織の中で自分の役割をこなす訓練でもあります。医師の世界は狭く、連携が大切で、この経験が生きてきます。百岳さんは、6年間レギュラーを務め、下級生を含めチームを牽引してきました。対外試合で社会人にもきちんと対応でき、医師に必要なコミュニケーションの土台はできていると思います。

生命医科学域
森永芳智 講師



「サークルというより部活です(笑)。週四日はコートに出ています。歴史のある部なので、たくさん先輩方との縦の人脈ができたのはありがたかったです。卓袱料理店でのアルバイトでは、企業の経営者などとのさまざまな出会いも経験できました。医師を目指す意味や社会的役割を問われ、客観的に考えさせられました」。

今後の目標は？

「病気の治療だけでなく、その人の悩みを受け止められる医師を目指します」。

理

理学療法士の国家試験は「自己ベストで臨めました」と晴れやかな笑顔で答えてくれた友岡佑太さん。愛媛県出身です。

「高校一年の時から理学療法士になりたくて、最初は四国の専門学校に行くつもりでした。しかし、情報収集するうち、やっぱり国公立大学に行きたいと思い、長崎大学の推薦入試で入りました。講義がびっしりで一日が終わる専門学校より、学びながら部活やバイトも経験してパラエティに富んだ四年間にしたかったのです。専門学校は一クラス五十名ほどなのですが、長崎大学は定員十八名に対して各専門の先生方が十名。しっかり学ぶことができ、距離感が近く、なんでも相談できました」。

同級生同士の絆も深まりますね。

「はい、いつも一緒に勉強しましたし、遅れている友人はみんなで助け合っ

入学時の私



コミュニケーション力が鍛えられる
理学療法士の難しさと面白さ

医学部保健学科 理学療法専攻 卒業

友岡佑太さん

TOMOKA Yuta

「ひざを上げる動作一つでも、曲げながら伸ばしながらで、使う筋肉は違います。それらを学んだ上で実習に行くので、知識が役立つ実感があります」。



リハビリでは、どうして動きが改善されたのか自分の言葉できちんと患者さんに説明できる、それが目標です。



「何より患者さんに安心感を与えたい」と自然な笑顔がこぼれる友岡さん。

先生からのメッセージ

自力で調べる習慣は、社会でも役立つ

医療系の場合、学科で将来の職業が決まるので、入ってから「ちょっと違うな」という学生がたまにいます。しかし友岡さんは最初から目標が定まっていたので熱心でぶれがありませんでした。大学での学び方はこれまでと違い、自分で課題を見つけ調べる習慣をつける、それを実習の前に気付けるかどうか大切です。社会に出てからも医療の進歩を学び、スキルアップやキャリアアップにチャレンジしてほしいですね。

生命医科学域
井口茂 教授



「理学療法士って、病院の中でも一番患者さんに近い存在だと思います。担当は固定で一日四十分ほど向き合いますし、動いているところも経過観察できます。だから治療で身体機能が高まる様子もわかり、喜びが共有できるところが大きな魅力です。僕は愛媛の病院に内定していますが、自分と関わる患者さんの人生が少しでも良くなるよう力を尽くしたいです」。

「ツ学びました」。

リハビリテーションの現場では、コミュニケーション力が試されるのでは？

「治療を嫌がる患者さんにどう話しかけていいのか、最初はわからず悩みましたね。先生からのアドバイスを受けて、自分が主導権を持ちながら積極的にリハビリに取り組みするための接し方やちょっとした言い回しなど、だんだんとなじむことができました」。

医療系の仕事をしたいけれど漠然としているという高校生に、この仕事の面白さを一言でいうと？

「理学療法士って、病院の中でも一番患者さんに近い存在だと思います。担当は固定で一日四十分ほど向き合いますし、動いているところも経過観察できます。だから治療で身体機能が高まる様子もわかり、喜びが共有できるところが大きな魅力です。僕は愛媛の病院に内定していますが、自分と関わる患者さんの人生が少しでも良くなるよう力を尽くしたいです」。

年

次主席という優秀な成績で歯学部を巣立った中角早希さん。入学当初からしっかりと目標を立てていたのでしょうか。

「歯科にもこんなにたくさんの分野があるのだと、入学後に初めて知りました。それまでの歯科に対する認識は、虫歯や歯周病の治療程度。将来のビジョンについても定まっていりませんでした。勉強を頑張るという目標だけは立てていました」。

五年次のCBTとOSCE（全国共通の歯学共用試験）、大学病院での臨床実習、そして国家試験。たくさんのハードルを乗り越えてきましたね。

「はい。CBTとOSCEが不合格だったから臨床実習に出られなくなりますが、それまでやってきたことが無駄になるので、まさに最初の一大イベント。いつも以上に集中して勉強しました。次に待っていたのが臨床実習です。患者さんと接するのは初めてだったので、不安でいっぱい。前日は緊張しました。現場では見学や先生の介助がメインだったので、私たちが指導しながら診察もする先生ってすごい、将来私も同じようにできるのだろうかと感じました」。

卒業後は口腔外科へ。なぜ、この分野を選んだのですか？

薬

科学科から大学院へ進学する戸口裕之さんは、学科内での優秀者には選ばれたほどの好成績。勉強は以前から得意だったのでしょうか。

「将来は薬に関わる仕事に就きたいと考えていました。興味を持って選んだ分野なので、勉強に対する意欲は入学当初から強かったですね」。

一、二年次は基礎的な科目中心でしたが、年次が進むごとに実験など専門性の高い科目も増えていき、学びたい分野を学べる充実感も強くなりました。それに大学は高校と違って、先生が勉強の面倒を見てくれるわけではありません。そうした環境に身を置くことで、受け身にならず積極的に取り組む前向きな姿勢の大切さを感じています。特に興味があったのは、有機化学系の研究です。分子に化学反応を起こして、新しい分子を効率的に得ることを目的とするもので、現在所属する医薬品合成化学研究室でも継続して取り組んでいます」。

関心があった分野の研究室に所属できて、研究は順調に進みましたか。「三年次に最初に取り組んだ実験はかなり苦戦しました。反応を進めると目的としている化合物以外の副生成物も生まれますが、その物質が全然特定できなかったんです。その正体がかめないと、副生成物の割合

諦めない心をつくった目標設定と途切れなかった学びへの探求

入学時の私



歯学部歯学科 卒業

中角早希さん

NAKASUMI Saki

歯科医師を目指して一緒に頑張ると支え合った親友たち。



年次を重ね、知識や経験が増える中で、歯科医師になる意識も徐々に芽生えてきました。



「大学では、先生、友人、患者さんなどいろいろな方との関わりを通じて、内面の部分で成長できました。仲間にも恵まれたので、勉強は大変でしたが苦労はありませんでした。歯学部で学ぶ六年間、途中で気持ちが緩んでしまう人も中にはいます。そうならないためにも、最初に目標を見つけた方がいい。私にとってはそれが勉強でした。社会人になっても、学びへの意欲を忘れないよう心掛けたいです」。

たくさんの思い出をつくった実習室にて。「初めて歯を削る切削の実習では、模型相手でもすごく緊張しました」。

先生からのメッセージ

臨床実習で際立った人間性

4年次の模型実習など、しっかり予習して臨み、周りの学生からも頼りにされていました。また、大学病院での臨床実習は患者さんとの関係づくりも学びの一つ。難しい部分もありますが、節度を持った上で親しく接することができ、患者さんからの評判も良かったです。同級生からさまざまな刺激を受ける中、良い友人に恵まれたのも、勉強熱心で人間性に優れていたからではないでしょうか。

歯学部総合歯科
臨床教育学
多田浩晃 助教



視点を変えながら試行錯誤して納得できる答えを追求しました

入学時の私



薬学部薬科学科 卒業

戸口裕之さん

TOGUCHI Hiroyuki

先行研究や先生のアドバイスを基に、仮説を立てて実験。その結果からさらに分析を繰り返していきます。



目的意識を持って勉強に取り組めば、難しい課題も自分なりに前向きに捉えられます。



先生や仲間からのアドバイスが課題解決のヒントとなり、実験が前に進むこともあります。

先生からのメッセージ

実直な姿勢で実験を繰り返す

研究室に所属した当初から非常に真面目な学生です。研究においても、他の人であれば大まかな結果で切り上げるところも、戸口さんは突き詰めて正確な結果を追求します。新しい結果を目指す我々の実験は非常に難しく、うまくいかないことも多くあります。これから大学院では、論理性に加えて、他の研究者との協調性も大切に、切磋琢磨してほしいと思います。

薬学部
尾野村治 教授



なんとか締め切りに間に合いました。安堵するとともに、視点を切り替えながらも一つの実験結果を最後まできちんとまとめることができました。また、手応えを感じられました」。

まとめられた実験内容が卒業論文になり、三月には学会で発表する機会もあったそうです。

「これまで先輩の発表する姿を見ていたので、しっかり準備をして臨みました。卒業後は大学院に進学するので、今後も学会での発表はあると思いますが、まずは地道に研究を深めて形にしていきたいと思っています」。

勉

強、部活に加えて、長崎ブレイクスループロジェクトの活動や、海外での企業インターシップ、留学などを経験した江島真典さん。目まぐるしい四年間だったのではないですか。

「確かに忙しかったですね。経済学部は頑張り次第で、卒業に必要な単位を早い時期に取得することができず。でもその分、時間の使い方が自分自身に委ねられているとも思っていました。一年次の最初の頃は大きな目標もなく、授業を受ける時どこかぼんやり。意識が変わるきっかけになったのは、春休みに参加した海外研修です。研修先だった大学は、タイのチュラロンコン大学。学生たちと共に学び、刺激を受けました。彼らはとても英語力が高く、勉強に臨む姿勢も真剣でした。帰国後は大学の講義で学んださまざまな知識を自分なりに理解して実践に移し、そうすることで経験値として落とし込むように心掛けました。ブレイクスループロジェクトやインターシップもそのプロセスの一環だったんです」。

なるほど。二年次の夏休みには、上海の旅行会社でのインターシップを経験したそうですね。そして留学は三年次の八カ月間、タイのチェンマイ大学へ。

「インターシップでは、長崎や九

入学時の私



自分の力で導き出した
知識を実践に移す学びのプロセス

経済学部 経営と会計コース卒業

江島真典さん
EIJIMA Masanori

海外展開を目指す県内企業に対して、学生がプランを提案し事業化につなげる「長崎ブレイクスループロジェクト」。4年次に代表を務めました。



視野の狭さを実感。やり残したこともあるけれど、それはこれからの課題に。



先生からのメッセージ

自信は目標を選び取る原動力

2年前、ゼミの面接で話をした時、積極的に考えて動ける能力が身に付いている、他の学生に対して良い影響をもたらしてくれる学生だと感じました。そして良い意味で自分自身に自信を持っています。だからこそプロジェクトで代表を務め、海外に対する意欲にも溢れていたのでしょう。これからも目指したい方向を的確に判断し、進んでいけると思います。

経済学部 成田真樹子 准教授



四年間通った片瀬キャンパス。石畳が印象的なアプローチにて。

建

築士になる夢を叶えるため工学部に進んだ川井沙那子さん。構造工学コースでは、建築の他に、車、機械、船舶など幅広い分野の課題と接します。どんなことを心掛けていましたか。

「難しい計算など、苦手だと分かっている課題は、周りの誰よりも早く取り組むようにしました。どうしても分からないところは同級生に相談し、解き方を教わるのではなく答えを教えてもらい、正解にたどり着くまで自分の力で考えてみるという方法を実践して理解を深めるようにしました」。

四年次には、社会問題にもなっている空き家対策に取り組んだそうですね。

「斜面地に建っている空き家をリフォームしました。二部屋を一部屋にするための解体や断熱材を入れる工事など、研究室の先輩に指示をもらいながら進めました。リフォーム後は空き家の有効活用が課題の一つだったので、自治会の集まりに参加して地域の皆さんと交流を深めたり、保育園の先生に活用方法について要望を聞いたりしました。空き家でイベントを開いた時には告知が間に合わず、参加者ゼロという苦しい思い出もあります。アポイントを取るなど初めての経験ばかりでした

入学時の私



苦手意識や弱点から目をそらさず
乗り越える方法を見つけた4年間

工学部 構造工学コース卒業

川井沙那子さん
KAWAI Sanako

昨年11月に室内の改修工事が完了した空き家。イベントスペースCRANE(クレーン)として3時間500円で貸し出しています。



なぜできないだろうと悔しい思いをしたこともあったけれど、自分なりの方法で克服しました。



リフォーム作業中の様子。フローリング張りなど一連の作業を経験しました。

先生からのメッセージ

枠組みを超えた発想に期待

自分自身の弱点を理解し、調査・研究など早め着手することに長けており、生き生きと頑張っている姿が印象的でした。就職先は木造住宅を主力とした住宅メーカーですが、既存の枠組みの中だけにとどまらず、それを超えたところで企画を提案できるといいですね。新しい家族形態、新しいライフスタイルなど、想像力を膨らませて、いろいろな人に喜んでもらえる住宅を造ってほしいです。

大学院工学研究科 システム科学部門 安武敦子 教授



が、先生の指示を待つのではなく、自ら考え率先して動くように心掛けていました。でも実は私、大学生になるまで引っ込み思案だったんです。勉強、研究、アルバイトなど、高校生の頃とは異なる学び方や経験を積んでいく中で少しずつ自信ができました」。

決断力と実行力、そして思いを貫くスタイルはこの四年間で磨かれたんですね。そんな持ち前のパワーを武器に、第一志望だった住宅メーカーの内定も勝ち取りました。

「競争率が高い企業だと分かっているけど、絶対にこの会社で働きたいという気持ち優先して、諦めませんでした。卒業後は、仕事と並行して二級建築士の資格取得を目指します。将来は、女性ならではの視点を生かした設計で、温かみのある木造住宅を建てたい。一級建築士になることも大きな目標です」。

大

環境科学研究室に所属し、大気汚染物質のPM2.5の測定に関する卒業研究をまとめた鐘ヶ江健太さん。三年次の夏に、自らモバイルPM2.5センサーを持って東京から京都まで歩いて計測したそうです。

「もともと歩くのは好きで、過去には長崎街道を一人で歩いたこともありましたが、今度は東海道を歩いてみたいと思い、せっかくなら研究に役立つことができなかつたら、環境科学部の中山先生に相談して、モバイルPM2.5センサーを貸していただきました。期間は十五日間、距離は五百キロ以上ありました。一人で歩き続けるのは肉体的にも精神的にもつらくて、一日目でくじけそうになりました。でも最後までやり抜くために、十五日後の関西からの帰りの航空券を予約しておいたんです。そこを指してなんとか気持ち奮い立たせ、最後まで歩き抜きました。結果的にそのデータが卒業研究でも役立ち、四年次の五月には学会発表までさせていただき、自分の努力が一つの形になってうれしかったです。」

そのように最後までやり抜く姿勢は、いつ頃身に付いたんですか。

「もともと好奇心旺盛な一方で、苦手なものはいっせいでやっちゃうタイプだったんです。大学二年次では、教職科目を受講するにあたって幅広い

入学時の私



決めたことを最後までやり切る 粘り強さで切り開いてきた道

環境科学部 環境保全設計コース 卒業

鐘ヶ江健太さん

KANEGAE Kenta

センサーとスマートフォンがひも付けられていて、GPSデータとともに1分ごとに記録していきます。



どんどんチャレンジしていく中で、自分の進みたい道が明確に見えてきました。



自ら小型のセンサーを持ち歩き、PM2.5のデータを集めた鐘ヶ江さん。

先生からのメッセージ

新しい世界に 自ら飛び込む積極性

最初にモバイルPM2.5センサーを貸してほしいと相談された時、とても積極的な学生だと感じました。その後、研究室に所属してから進んでアイデアを出して実験や観測に取り組み、現在はその内容をまとめた英語論文を執筆中です。特に、論理的に考えたり、説明したりする力が成長していると思いますし、持ち前の積極性で、研究室の他の学生にも良い影響を与えています。

環境科学部
中山智喜 准教授



釣

りが子どもの頃から大好きだった柏谷祐貴さんは、養殖を主とした水産業への興味が高まり、水産学部に進学。大学生生活を送る上で指針となった言葉があるそうです。

「先輩から、大学は学びたいことや関わりたいと思う人を自分で選べる場所、そういう自由度を生かさないと損だと言われました。外に出てさまざまな人との出会いや経験をしたいのも、この言葉があったから。全学モジュールという選択科目も、社会人になったら専門外のテーマを学べるチャンスは少なくなるだろうと考えて、美術や家族社会学など、これって何、面白そうだなと感じたテーマを選びました。」

水産学部では、二年次にコースを選択し、四年次から研究室へ配属されます。生殖生理学研究室に進んだのはなぜですか。

「生殖生理学研究室は、養殖に必要な稚魚の生産に関わる研究を行うところ。将来、幅広い視点で水産分野に関わることができると思いますし、事前に参加した臨海実習では環東シナ海環境資源研究センターに四日間宿泊して実験をしました。密度の高い時間を過ごす中で、ここでなら自分がやりたい研究ができるのかもしれないと思いました。水産学部の先生方は、授業や実験の中で

未知の領域へ果敢にアプローチ その先にあったのは大きな達成感

水産・環境科学総合研究科 博士前期課程 水産学専攻 修了

柏谷祐貴さん

KASHITANI Yuki

入学時の私



あるはずの遺伝子を見つけられず、八方ふさがりになったことも。それも今では良い経験。



修士論文発表会では学部を含めた3年間の成果を発表。

研究室配属後は環東シナ海環境資源研究センターがある長崎市郊外に引っ越し、研究に専念。すぐそばのいけすにも数えきれないほど足を運びました。



先生からのメッセージ

興味を持って 掘り下げる力

魚が光や水温にどのように依存し繁殖活動を行っているのかは、まだ解明されておらず研究を行う必要があります。柏谷さんが取り組んだテーマは、特に研究が進んでいない分野です。新しい研究はやはり大変ですが、興味を持って掘り下げ、自分なりに考えて行動していました。魚にとどまらず生物学的にも、光を感じるメカニズムを知る上で貴重な研究になりました。

海洋未来イノベーション機構
環東シナ海環境資源研究センター
センター長
征矢野 清 教授



「はい。繁殖活動のメカニズムの解明に結びつく重要なテーマでもありません。血管が光を感じているのは本当なのか、そしてどのような変化が起こっているのか。この二つについては、一定の成果が得られたと思います。卒業後は研究を離れますが、これからさらに種苗生産の研究が進めば、飼育にかかるコストを削減でき、市場価格にも反映できると思います。」

水産業の未来に可能性をもたらす成果を残して、柏谷さんは新たな世界へ羽ばたきます。